



京都産業大学法学部創設 50 周年記念シンポジウム

京都産業大学の現在と未来

目 次

法学部創設 50 周年を迎えて

京都産業大学法学部長 植村 和秀

京都産業大学というコミュニティからの可能性

株式会社美京都 代表取締役 中馬 一登

法学部で学ぶということ

京都産業大学法科大学院 教授（当時） 釜田 佳孝
（現 弁護士、弁理士）

解題：法学部創設 50 周年記念事業について

京都産業大学法学部は創設 50 周年を迎え、2017 年に記念事業を催した。具体的には、大学祭（神山祭）期間中に、「京都産業大学法学部の現在と未来」と題するシンポジウムを開催するとともに、学部生作成のポスター展示を実施した。また、秋学期終了直前の時期に、2 回目の学部生作成のポスター展示を実施した。それらの概要は以下のとおりである。

法学部創設 50 周年記念シンポジウム「京都産大法学部の現在と未来」

開催日時：2017 年 11 月 4 日（神山祭期間）14：30～16：50

会 場：京都産業大学 13 号館 1 階 13101 講義室

司 会：中谷真憲教授

第1部 法学部学生による発表

本学法学部の「現在」を知っていただくため、次のとおり現役学部生が研究成果を発表した。

- ① 2017年度政策立案コンテスト入賞3チーム
(岩本誠吾ゼミ、岩永昌晃ゼミ、中井歩ゼミ)
- ② 平成28年度グローバル人材PBLチーム

第2部 卒業生による講演

本学法学部OBのお二方に、次のとおり、法学部の「未来」を語っていただいた。

- ① 株式会社美京都 代表取締役 中馬一登氏
「京都産業大学というコミュニティからの可能性」
- ② 京都産業大学法科大学院 教授(当時) 釜田佳孝氏
「法学部で学ぶということ」

ポスター展示(前期)

開催日時：2017年11月3日～5日(神山祭期間。4日にコンテストを実施)

会場：京都産業大学 13号館地階ホール

コンテスト優秀作品

第1位 芝田文男ゼミ1班「子どもの貧困問題」

第2位 芝田文男ゼミ2班

「高齢社会を生きる～今私たちにできること～」

第3位 履修アドバイザー

「履修アドバイザー活動報告～これまでの軌跡、これからの奇跡～」

ポスター展示(後期)

開催日時：2018年1月10日

会場：京都産業大学 13号館1階13124教室(常設模擬法廷)

コンテスト優秀作品

- 第1位 高島淳子ゼミ働き方改革グループ
「中小企業で働きやすい環境をつくるには」
- 第2位 芝田文男ゼミ3回生班「奨学金問題を解決せよ」
- 第3位 吉澤卓哉ゼミ4班
「どうすれば救急車の誤報を減らせるのか」

以上の記念事業のうち、本学ウェブサイトに掲載された学部長挨拶およびシンポジウムにおける2つの講演を以下に掲載する。

法学部創設 50 周年を迎えて

京都産業大学法学部長 植村和秀

法学部は昭和 42 年（1967 年）4 月に創設されました。経済学部、理学部に続き、経営学部、外国語学部とともに、神山の地に誕生しています。戦争が終わって 20 年と少し、上り調子のなかで変化が進んでいった時代です。

それから 50 年。世界は根本的に変化し、日本にもその余波が及んでいきます。法律、政治、政策は、今も昔も変わらず重要ですが、具体的な形は変化し続けてきました。変化に乏しそうな法律の条文であっても、どのように解釈するかは状況によって変わっていきますし、新しい問題が浮上すれば、どのように利用するかも変わります。研究の場でもある法学部は、その変化をいち早く学問的に把握し、それによって最先端の情報を学生に伝え、未来に向かう関心を喚起する使命を担っています。

半世紀のあいだに何度も行なわれてきたカリキュラム改革は、そのような使命を具体化するための実践でした。どのような科目が設置され、どのように学んでいくかというカリキュラムのあり方に、研究の成果と教育の方針は現れます。研究と教育を創造的に融合させるために、社会と直結する学問の強みを活かして、今後も法学部は、学問に裏打ちされた先進的な教育に取り組み、世界と日本の変化の実相を伝え、未来を考える手がかりを提供していく所存です。

この 50 周年の佳節に際し、法学部では改めて、社会を立派に支える人材をどのように育成していくか、学部として社会にどのような貢献を行えるかについて、真剣な議論を進めています。新しいカリキュラムを来年度から実施するとともに、社会とのつながりをさらに大切にして、法学部の未来を作り上げていくことを目指しています。

現役の学生諸君が、どのような関心を持ち、学んでいるのか。学修成果

のポスター展示を神山祭中に実施し、変化する法学部の学びを広くお知らせいたしたいと存じます。また、卒業生の方々にご講演を賜り、法学部が果たしうる役割、果たすべき役割につきまして、広くご意見を頂戴いたしたく存じます。

(2017年8月)

京都産業大学というコミュニティからの可能性

株式会社美京都 代表取締役

中馬 一登
(2011年法学部卒)

はじめに

よろしくお願ひします。30分くらいの短い時間なので、皆さんと楽しく過ごしていきたいと思ひます。

まず自己紹介をします。1987年4月に大阪で生まれて、京都で育ちました。そのままずっと京都におりまして、2006年に京都産業大学法学部に入学しました。1年間、休学したので、5年後の2011年3月に卒業しました。その2年後、2013年9月にまず、個人事業主として創業しました。翌2014年6月に株式会社美京都（みやこ）を設立して、2016年にグローバルシェイパーズコミュニティ（Global Shapers Community）京都ハブのメンバーに選出していただきました。

このグローバルシェイパーズについて説明します。皆さんご存じの世界経済フォーラムは、「ダボス会議」と呼ばれる年次総会で有名ですが、スイスのジュネーブに本部を置くその大きな非営利財団の33歳以下のメンバーにいま、選んでもらっています。世界中には458ものハブがありまして、シェイパーの数が6,195人います。日本には、東京、横浜、大阪、京都、福岡の五つのハブがあり、約100人のメンバーがいます。東京にはすごいメンバーが多くて、現在は抜かれたかもしれませんが、最年少上場を果たした㈱リブセンスの村上太一さんとか、フェンシングの元オリンピック選手の太田雄貴選手もメンバーです。最近入った人では、歌手・尾崎豊さんの息子さん（尾崎裕哉氏）。五郎丸（歩）さんがいま、入るか入らないかというような状況です。東京のメンバーにはそういう人たちがいます。

京都にはいま、10人くらいのメンバーがいて、前年度に私はその代

表を務めました。代表になると、8月にスイスに呼ばれます。私も行ってきました。英語は全然得意ではないのに、ノリと勢いだけで行って4日間、どうすれば世界、社会がよくなるのかということについて、京都代表として意見交換をし、情報共有をさせていただきました。全世界から400人くらいが集まるなか、日本から5人の代表が参加して、4日間を過ごしました。そういう個人的な活動もしています。

経営理念は「我がままであれ！」

会社についても少し紹介させていただきたいと思います。株式会社美京都（みやこ）という会社を経営しています。経営理念は「我がままであれ！」。シンプルでわかりやすいですね。どういうことかということ、自分らしくいてほしいというのが、私の信条としてあります。「我がままでいてほしい」と。自分らしく、我がままなだけでは、いかに社会に貢献できるような、イノベーションを起こせるようなことを考えられるのか、というのをポイントとして、いま経営をしています。

事業内容は、大きく三つに分かれています。「食品・飲食」「観光・インバウンド」「教育・人材採用」です。「食」については、食品企画・製造・販売です。「観光」としては、ゲストハウスなど宿泊施設の運営です。あるいは訪日外国人向けの観光ガイドなど。「教育」としては、留学事業、人材採用、就職支援など。多岐にわたって、自分がしたいことをどんどんやらせてもらっています。

最初は個人事業主として創業したのですけれども、「みやこソース」という、食料品のソースの商品開発、販売卸から始めました。

その次には、宿泊施設の運営として、京都の古民家などを再生・活用し、海外のプライベートヴィラなどもいま、運営したりしています。それから、観光ガイドマッチングということで「TOMODACHI GUIDE」。日本人ガイドと外国人観光客をつないで、両者が友だちのような感覚で旅を楽しむ、C to C 向けの観光ガイドマッチングサービスもしています。

留学事業では、「グローバル・ティーチャー・プログラム（Global

Teacher Program)」といたしまして、セブ島で英語を学びながら、現地の公立小学校で教育実習ができるプログラムがあります。始めてからまだ1年も経っていないのですが、参加者はすでに累計41人になりました。まだ、できたての事業ですが、これはなかなかすごいです。いま、グローバルリーダーを増やしていこうといわれます。グローバルリーダーを増やすことも大事なのですが、私たちは、そのための先生、教育者を育てようという目的で、この「グローバル・ティーチャー・プログラム」を作りました。まだ1年目で、開催回数はまだ2回くらいですが、参加してくれた人たちが感動しすぎて、いまどうなっているか。参加体験者たちがいま、自分の在籍する各大学の先生、教授などに対して、「めちゃくちゃ良いプログラムがあるんです」「私たち、参加して本当に変わりました」「大学でこういうプログラムを絶対に入れたほうがいいですよ」と自発的に紹介してくれています。その結果どうなったか。このプログラムを体験した人たちが各校の先生たちに提案した結果、早ければ来年に単位認定プログラムになるところまでできています。かなり勢いのある事業です。法学部はちょっと関係ないのだけれども、もしよかったら、京都産業大学でもこういうものを入れてほしいと思っています。

いま、うちのメイン事業は、人材採用支援です。就活生対象イベントなどを結構、開催しています。私自身、就職活動の仕方とかスタイルとして、既存のスタイルはあまり好きではなくて、何かもっと本質的というか、学生の良さをダイレクトに企業にぶつけられるようなプラットフォームづくりや、そういう企業を集めてマッチングするようなことをいま、しています。以上が、当社の会社説明になります。

大学生時代に学んだこと

今日はせっかく若手OBとして呼んでいただいているので、大学時代にどんなことをしていたのかをお話します。法学部の50周年記念事業ということで、ここに呼んでいただいて本当にありがたいのだけれども、私は全然大学に行っていなかったというか、法学部の授業は難しすぎるん

ですよ。

それで、どういうことをしていたか。サークルを常に三つくらい掛け持ちしていました。アルバイトを三つ掛け持ち。なんか、三つが好きなんです。社会人フットサルチームに所属しながら、友だちをすごく大事にしたわけです。友だちと遊び、旅もしました。ということは結局、授業にほとんど出られないんですよ。これは、私が悪いのかどうかかわからないのですが、この状況を見ていけば、先生たちも「しょうがないな」というふうになると思います。

では、大学時代に、私は何を学んだか。法学部で学んだこともきちんと話さないといけないなと思っています。法学部で学んだことは、「法律が難しすぎる」ということです。皆さん、ご存じのとおりです。どうなるかということ、そうすると人間は諦めるんですね。私のいまの経営哲学の一つでもあるのですが、「できないことをやらなくていい」「できるやつがやればいい」と。これを私は、法学部にきて学びました。「こんな法律、いまのぼくには無理だ」と。「それだったら、この法律関係は、仲のいい弁護士さんとか、そういう方にお願ひすればよいのではないか」「ぼくは、できることをとことんやろう」と思いました。そういうことを、法学部の先生方からとか、授業で学ばせてもらいました。

京産生の特徴

では、大学で何を学んだのか。私が学んだというか、休学を含めてこの大学に在籍した5年間、影響力があったのは、京都産業大学の友だちでした。そこで京産生の特徴について考えてみたいと思います。私も就職活動は本気で、少しだけしたのですけれども、よく人事の方に言われたのが、「京産生か。なるほど。じゃあ、おまえ、元気があってアホで情熱的やなあ」ということです。いきなり決めつけられているんですよ。「なんだ、この文化は」「先輩たちはどういう就活をしてきたのだろう」と思いながら、私は就活をしながら、「京産生」＝「アホで元気があって情熱的」というのは、教えてもらっていました。

これから述べることは、京産生の特徴についての私独自の理論なので、文句のある方は私自身に言ってほしいと思いますけれども。まず、愛嬌があって、元気があって、アホになれる、情熱的なやつが多い。ええやつが多い。起業家が多いというのも、私独自の意見、感想です。私の代でも、とくに最後の起業家はすごく多い。これは先生にも聞きたいのですが、なぜか法学部出身者に起業家が多いのです。以前、先生に「なぜなんですか」と質問したら、「難しすぎる論文を読みすぎて、逃げたくなくて、クリエイティブとかそちらのほうに行きたくなくなるんじゃないか」と。起業家というのは自分たちで「こういうものがいいんじゃないか」と考えて突き進むのですけれども、法学部は難しすぎて、みんな逃げたくなくて、クリエイティブを目指そうとする傾向があるのか、私自身もそうですし、私のまわりでも法学部出身でいまもバリバリ頑張っている友だちがすごく多いです。

なぜこのような人間が育つのか

なぜ、このような人間が育つのか。これも勝手に、少しおもしろおかしく自分のなかで考えました。

まず、仮説1として「立地悪い説」があります。京都産業大学は立地が悪い。山奥です。そうすると、ちょっと雨が降ったり、寒かったりしたら、「行かんところ」という気持ちになります。立命館大学の衣笠キャンパスにしても、まだ京都市の中心部から近いから、ちょっと天気が悪くても行こうかなと思う。でも、京都産業大学だけは、私も気持ち的には本当に行きたかったのですけれども、天候の関係で行けなかったことが何度もあった。ということは、私だけではなくて、いろいろな学生、過去の先輩方も同じようなことがあったのではないか。じゃあ、学校へ行かなかったらどこへ行くのか。私は学外の活動が多くなるのではないかと思います。私はアルバイトを三つくらいしていて、お昼のアルバイトもしていました。明日は雨で寒いと思ったら、「店長、あした行きます」と連絡をして、アルバイトに行かせてもらったりしました。根性のある子は、途中まで頑

張って行くのですが、途中で「ああ、だめだ」と思ったら、友だちの家へ行くんですね。そうすると奇跡的なタイミングで、全然知らない友だちがその家において、「おまえ、なんか見たことある」という話から友だちとの交流が増えていって、またコミュニケーション能力が上がる。そういうことで、京産生らしくなるのかな、と思います。プラスアルファ、皆さんご存じのように、山奥のかなりてっぺんに大学があるので、圧倒的開放感があり、なんかこの世を手にしたかのような気持ちになれる。この立地という面からも起業家になりやすかったりする。あるいは「てっぺんとったぞ」感につながるのではないかな。この開放感、空気のきれいさによって、ストレスが発散され、エネルギーが充電されて、元気になりやすいのではないかな。それがまず、「立地悪い説」です。

次に「学歴びみょう説」。これは、先輩方も皆さん、ご存じだと思います。私も、がっつり就職活動をさせてもらったのですが、就活でざりざり有利ではなかったという事実にも追いやられました。産近甲龍（京都産業大学・近畿大学・甲南大学・龍谷大学）以下というのは、残念ながら大手企業のOB・OGからのお声掛け、お誘いがありません。関関同立の人たちは結構、別にエントリーもしていないのに、勝手に大手のOB・OGから連絡がきてお茶をしているという事実を、私は就職活動中に知りました。「学歴じゃない」と言っている大手の人事に、「ふざけるな」と。「私は誰よりも早くエントリーしていたのに、エントリーもしていない関関同立の人たちは全員、先輩たちとお茶してるやないですか」と。「これは、どういう社会のシステムなんだ」と感じて、私は、「やってやろう感」がどんどん強くなっていきました。「こんな社会だったら、じゃあ、いい。なんで雇われなあかんねん。自分で這い上がってやるわ」ということから、私も独立しようという気持ちが強くなったと思います。そういうことが、もしかしたらあるのではないかな。皆さん、いまの話を聞いて笑っていましたが、経営者になっている私の友人たちに聞いたら、同じでした。京都産業大学は、学歴としてメリットないし、自分でやったほうが早い、みたいな気持ちでやっている人が多いと思います。

もう一つ、京産生の強みというか、アホという意味の強みについて。いまは情報化社会で、なんでもわかってしまう。ですから、事前にリスクもわかってしまう。例えば、「こういうサービス、いいんじゃないか。これをやりたい」と考えたときに調べたら、他社が、大手企業がすでに手がけているとわかった場合、どうなるか。「もうやってるし、無理や。大手もやってるし、やめよう」となる。もしかしたら、その人のほうが思いを持っていて、やったら大手を超えるようなサービスになる可能性があるにもかかわらず、情報化が進みすぎていて、すぐに挑戦した先のことが見えてしまう。それで挑戦をやめてしまう人たちが増えているのではないかと。ここで、京産生の強みとして、アホという部分があるのですけれども、このアホさがあれば、「いや、けどなんか、俺ら、いけるんじゃないか？」みたいなことがあったり、「わからんけど、俺ら結構いけるかなあ。運もいいし」「おもしろいやん、おまえコミュニケーション力高いし。ちょっとやってみようや」みたいなことで、できたりすると思うんですよ。私自身もそのノリでやらせてもらったので、リスクを恐れずに挑戦していく京産生の気質は情報化社会にぴったりじゃないか、という独自の理論をもっています。

大学生の課題と解決方法

ただし、いまの大学生の課題もあります。私はいま、四天王寺大学の講師もさせてもらっています。クラスをもって授業をしています。ここで大学生のリアルな、表面的じゃないところも見えてきました。京産生を含め、そこには共通するものがあるのではないかと考えています。

何が課題かという、一つ目に、カッコいい大人との出会いがない。二つ目に、社会で価値を出す実践の場がない。三つ目に、信用の重要性がおろそかにされているのではないかと。そのように、私自身は思っています。

それでは、ここを京都産業大学としてどのようにして解決していくか。それには、①カッコいい社会人や起業家と会える機会の提供と、②長期インターンや企業支援の多様性が必要であり、③リアル社会の仕組みが

わかる授業や塾があったらよいのではないかと考えます。

カッコいい社会人や起業家と会える機会

詳しくはどういうことか。まずカッコいい社会人や起業家と会える機会について。京産出身のカッコいい大人と会える授業というのは、ありそうでなかなかありません。私は、中谷（真憲）先生のグローバル人材論の授業に行かせてもらったことがあります。そのときに先生本人からも学生たちからも言われたのは、「こんな大人を待ってました」「京産出身の先輩で、こんなカッコいい先輩がいると思ってなかったです」ということです。その授業はいつも、終わったあとの質問に、全然手が挙がらない授業だったらしいのですが、私が行ったときの授業が終わったあとは、バンバン手が挙がりました。そのあとも私のところへ来てくれて、「中馬さんのところ、インターンしていないんですか」「勉強させてください」と言ってくれるような人たちがいました。ですから、もっといろいろな学部でも、法学部のなかのゼミも、一般教養の授業としても、こういう機会があつていいんじゃないかと思っています。

次に、カッコいい大人と会えるサークル、イベント。これは京産以外の、いま旬なタレントでもいいし、例えばホリエモン（堀江貴文）さんとか、私は西野亮廣さんなどがすごく好きなのですけれども、ああいう大人たちと一緒に遊べるイベントを京都産業大学が企画するといったことです。しかも、だいたいこういうことは、京都産業大学縛りにするので、京産生限定参加にするのですけれども、そうじゃなくてオープンにして、他大学からもどんどん来てもらう。いろいろな大学生たちが来ます。もちろん京都産業大学の学生も来ます。京都産業大学の学生たちは、他大学から来た学生たちとも交流ができる。そういうことをしていたらどうなるか。世間の目が、「京都産業大学、めっちゃくちゃイケてるよね」と。「本当に日本の将来、若者のことを考えて、すごくオープンにしているじゃないか」「率先して、日本の大学のなかでも、そういうふうな若者に、チャンスや可能性を広げられるような機会をつくっているね」というブランディングになっ

ていくのではないかと私は思います。

それから、世界一を知ることができる機会提供。これは何か。いまでも「チャレンジ精神の源流」という授業はあるのでしょうか。私が大学に4年間通ったなかで、唯一といってよいほどよく覚えている、そして全部の学費をここに注いだのではないかと思うくらいの、「チャレンジ精神の源流」という素晴らしい授業がありました。私は単位を取ったあとも、ずっと一人でも通った授業でした。かつてNHKで放映されていた「プロジェクト X (エックス) ～挑戦者たち～」というイノベーティングなことをした会社を特集した番組、あるいは現在もある「プロフェッショナル 仕事の流儀」という番組に出演した人が、来てくれる。そして、ショートムービーというか、その番組の一部を見て、そのあとにその人が、じつはこんなことがあって、こういうふうに乗り越えたんですよという裏話を教えてくれる。私たちは、「すごいな」「こんなかっこいい大人がいるんや」というのを、私は「チャレンジ精神の源流」という授業で学ばせてもらいました。京都産業大学で私もいろいろと授業を受けましたが、これをメインというか、もっと表に出してよいのではないかと思います。

この授業の内容はどうでしたかと問われると、私も正直、あまり覚えていません。唯一、覚えていることは、むちゃくちゃ熱くなれたことです。熱くなれて、こんなかっこいい大人がいるんだな、イケてるな、こういう人になりたいな、と思わせてもらえた。毎週、この授業は、そういうわくわく感をもたせてくれました。私をそういう気持ちにさせてくれた授業でした。

長期インターンや企業支援の多様性

次に、長期インターンや企業支援の多様性について。いま、就活生に聞いていても、インターンをどれだけ受けているか、有名なインターンシップに行ったかどうか、一つの指標になっていると聞きます。「私は、有名なLINE(株)にインターンに行きました」と、どや顔で言っていた人がいたのですけれども、「どうだった?」と尋ねると、ワンデーのインターン

で、会社へ行って訪問資料をもらえる、と。「でも選ばれたんですよ」みたいな感じだったのですが、いや、そんなものに行ったところで、なんの成長にもならないし、就職活動における強みとしても、大手企業だろうが1日のインターンでは、すごいとは思わないわけです。じゃあ、どういふふうにして行ったらいいかという、プロジェクトベースで、ラインのこの事業のプロジェクトを開発からすべて私が手がけました、というような学生がいたら、なかなかおもしろいなと思う。

私が教育のなかですごく大事だと思っていることは二つあります。一つは、カッコいい大人と出会うこと。もう一つは、そのカッコいい大人とのプロジェクトを通して学ぶことです。この二つがすごく大事だと思っています。じゃあ、企業のインターンで、企業のなかにあるプロジェクトのインターンを、もっと京都産業大学のなかでも重視するというか、企業名ではなくて、小さな会社、うちの会社でもよいのですが、何かプロジェクトを何か月間、こういうふうにやりましたというようなものを、もっともっとしっかりやっていけばよいのではないか。

次に、学内ビジコン（ビジネスコンテスト）からのアフターフォロー。ビジコンなどを、いろいろな大学がしていますけれども、これをもっとしていきながら、ちゃんとアフターケアまでしていく。例えば私たちのような京産大出身の経営者、OBがきちんとついてあげてフォローまでする。そういうことも大学側がメインとなってしてくれたらおもしろくなるのではないか。

それから、いろいろなおもしろい学生プロジェクトがあると思うのですが、これにも社会人がどんどん入っていく。いろいろな社会人が協力する本気の学生プロジェクトもやっていく。

それから部活動。起業学部とかイノベーション学部みたいな、部活動なんだけれども、起業を勉強して、本当に先輩たちと何かサービスを常につくりあげていくみたいな活動ですね。

あと、イスラエル・エストニアツアーみたいなもの。シリコンバレーアームみたいなのがあって、最先端の企業やサービスを勉強しに行こうとい

うようなものがあると思うのですが、現在ではイスラエルやエストニアのほうがおもしろい。けれども、こちらのほうに目を向けて、本当に連れていこうとする大学は、私はまだ全然聞いたことがありません。こういうことを、京都産業大学が誰よりも先にやっていったらよいのではないかなと思っています。

リアル社会の仕組みがわかる授業や塾

次に、リアル社会の仕組みがわかるような授業や塾があればよいのではないか。最先端の情報、技術をわかりやすく伝えるというところで、やはり学生は情報量が圧倒的に少ない。何かのアイデアであったり、自分の進路選択もそうですが、その可能性を広げようと思ったときに、いろいろな情報があればあるほど、その情報が絡み合えば絡み合うほど、新たなものが出てきたりとか、こういう道もあるなというふうになるとしています。私は、大学生の人たちに、もっといろいろな情報が自然と入るようにしてあげられたらいいなと思っています。

例えば、TechCrunch（テッククランチ）という情報アプリがあります。これはアメリカの超最先端の情報などが入ってきます。全部英語です。英語なんて読めないから、じゃあ大学側で、いろいろな最先端のおもしろい情報、英語でしか見られない情報を、日本語訳にしてわかりやすくして、つねに京産大生が見られるようにするというようなことも考えられると思います。

あるいは、いまの子たちというのは、私たちでもそうですけれども、時給ベースでアルバイトを考えたりする。就職活動も、新卒で給与はこれだけだとか言い出すのですけれども、経営側からすれば、この給料をもらえるまでの価値出せないぞ、みたいな話です。そういうのも絶対、経営者あるいは個人事業主になって、自分でサービスを生みだして給料を払うという行動をしない限り、腑に落ちないし、わからない。そういうことを大学時代に感じようぜというので、せっかく大学内に飲食店とか学食とか本屋とかがあるのだから、それを全部、大学生で経営したらどうか。こういう

のは、おもしろいと思います。

あとは、経営者の鞆持ち授業みたいなもの。京産出身の経営者とか、おもしろい社会人のそばにずっとついて一日を過ごすとか、本当のビジネスマン、社会人の動き方を勉強する塾ですね。あるいは「京都産業大学ええ奴塾」。いかに人から愛され、愛せる人間が、これからの時代、求められるか。有利に生きていけるか。そういうことを私自身は思っているので、そういう道徳的な部分を学べる塾などを、大学側でつくっていったらおもしろいのではないかと思っています。

信用人間が最強

次に、信用人間が最強ということがとくに伝えたかったところです。学生たちに言いたかったけれども、学生が会場にあまりいないので、ここにいる数少ない学生の人たちは、友だちに伝えてほしいと思います。

仕事の契約書や投資家からの借入も、信用があれば、書面など要らないわけです。極論ですよ。なぜかというと、私もそうです。本当に信用している人とは、契約書などはどうでもよい。私は初期に飲食店を始めたのですが、お金が少し足りなかった。それで、投資家さんというか、知り合いの社長に話したときに、「いくら足りないの?」「このくらいです」「そうなん? あした事務所へ来い。それぐらいだったら、すぐに出してやるから」と。「えっ? いいんですか」「ええよ、ええよ。昔から知ってるし、おまえがもし失敗して、この金パーンとなっても、別にええわ」みたいな。「きみなら返してくれるやろう。将来、ビッグになるやろう」とかね。「あした来い」と言われて「はい!」と行って、先輩に助けられました。私はそのとき何も書いていません。でも信用があったので、お金を借りることができて、きちんと返しました。信用さえあって、信用されたらどうなるかということ、ぼくはもっとこの人に恩を返したいと思うし、この信用に応えたいと思うから、仕事をもっともっと頑張る。より頑張って、喜ばせようとする。そうすると、もっと信用される。ずっと幸せの価値観がアップしていくのですけれども、こういう信用さえあれば、どういう状況にな

ろうが生きていけるのではないか。ですので、皆さんは法学部で法律を学んでいると思うので皮肉にはなるのですけれども、信用さえあれば、法律とかルールを無視したような、本当に信用だけで生きていけるような人間が生まれるのではないか。法律を勉強している法学部だけれども、法律を無視できるくらい、人間力のある人間を育てる学部になったらおもしろいのではないかと私は思っています。

これからの京都産業大学

最後に、これからの京都産業大学は、かっこいい大人と出会えて可能性が広がる場所でありながら、人から信用されて、愛される人間が育つ環境になるような大学、学部になってくれたら、私はうれしいなと思います。

最後にグローバル。妙心寺退蔵院副住職の松山大耕（まつやまだいこう）さんは、ダボス会議（世界経済フォーラム）にも出ている私たちの先輩でもあるのですけれども、彼が学生たちに学びを説いている場所があります。私たちから見ても、めちゃくちゃかっこいい先輩、大人です。こういう人たちと交われる場所を、グローバルというところではつくっているのですが、これをもっと大学とか、学部でやってもらえないかなと思います。

そういうことで私の思いをお話ししました。私の率直な意見について、先生はどう思われますか。

○司会（中谷。以下同じ） 中馬さん、本当にありがとうございました。

こうして話を聞いて、改めておもしろいなと思いました。ものすごく率直な話をしていただいているけれども、たぶんアホではないんですよね。中馬さんはじめ、そうなのですからけれども、ここのところ立て続けに3人、4人ぐらい、わりと若い産大の起業家の方に会ったのですが、皆さんに共通するのは、きわめて頭がいいことです。もっと言うと回転が速いです。たぶん、起業家の人には、そういう人が多いのだらうと思います。

それと、やはり行動力がめちゃくちゃあるので、考え込む前に、動き

ながらどんどんやっていく。うちの大学には、そういうタイプの人がじつは多いのではないかと最近思っています。中馬さんは、その筆頭だと思えます。

●中馬 そうですか。私の仮説についてはどうですか。

○司会 仮説は、いいんじゃないですか。大学での学びって、「野望をもってはみ出せ」、というのがあると思うのです。まっすぐに、なんかその学問のプレセット (preset) を守って伸びていくのがもちろん王道として8割方、存在している。だけど逆に、それに対して、いいアレルギーをもちながら、野望をもってはみ出していく。それがパワーになるわけですね。どちらからも面白い人材が出てくるのがたぶん一番強い大学かなと思っています。

今日、そういう意味では、王道の方はこのあとの釜田先生に代表して出ていただきますので、中馬さんは新しい方で、逆に野望をもってはみ出していくタイプとしてしゃべっていただけたかなと思っています。

せっかくなので、こういうカッコいい先輩がいるということは、学生の皆さんに伝えていただいて、どんだんのぼって行ってほしい。もっと暴れてください (笑)。

●中馬 はい、暴れます。100周年記念に来られるように (笑)。80歳でここに登壇するつもりなので、よろしくお願いします。

○司会 私は多分いけませんので (笑)、よろしくお願いします。

そういうことで、中馬さんでした。

●中馬 ありがとうございます。

—(拍手)—

法学部で学ぶということ

京都産業大学法科大学院 教授 ^{かま}釜 ^だ田 ^{よし}佳 ^{たか}孝
(1974年法学部卒)

はじめに

最初に法政策学科の学生の発表とグローバル人材 PBL チームの発表、そして中馬さんのお話を聞いていて、時代の流れが全然違うと感じました。乗り遅れているのではないかという恐怖感をもっているのですけれども。

産大出身のかっこいい先輩に会うとか、授業でそういう人の話を聞くということからすると、私は真逆のほうで、泥臭くてかっこ悪いタイプかもしれせん。

とりあえず、時代がずいぶん違うのですけれども、本日はタイトルを「法学部で学ぶということ」としました。内容としては、私なりに法学部の将来を考えたときに、どうあってほしいかを簡単に提案します。基本的には京都産業大学における私の略歴みたいな話になるかもしれません。

私の略歴

私の略歴は次のとおりです。1970年に本学法学部法律学科に入学して、74年に卒業しています。79年に司法試験に合格していますから、5年かかっています。受かったときは27歳でした。親は、「こいつ、どうなるんだろうか」「このまま放っておいたら、どこにも就職できないし、プー太郎みたいなかたちで、家族に迷惑をかけていくんじゃないか」と心配していたわけですが、なんとなく最後に急に神風が吹いて、試験の予想もピタッと当たりまして、本当に運良く合格しました。

そのあと、私の場合は「関西法律特許事務所」に入所しました。いま結構、関西では有名な事務所になっています。そこでイソ弁をさせていただ

いて、5年経って、いまの自分の事務所を立ち上げました。最初は「大和法律特許事務所」というかたちで弁理士と一緒に仕事をしていました。そのあと弁理士と分かれて、現在は「大和法律事務所」を私一人で営んでいます。

京都産業大学には、大学の4年間在籍したほか、1987年からは大学の法職講座の学外講師をさせていただきました。1990年からは非常勤講師として、破産法とプロゼミを担当しました。2004年にロースクール（法科大学院）ができましたので、そこの特定任用教授を務め、現在に至っています。京都産業大学にはロイヤーズクラブとあって、法律専門職や大学の研究員の卒業生が入っている団体があるのですが、そのロイヤーズクラブを2005年につくりました。私は2010年からその会長を務めています。

当時の京都産業大学

私が本学に入ったのは1974（昭和45）年です。ご記憶にある方もおられるかもしれませんが、この前年は、全共闘らの学生たちが東大の安田講堂を占拠していたのですが、機動隊がその封鎖解除をした年でした。いわゆる東大安田講堂事件です。同志社大学や立命館大学の学生とつきあっていても、まだまだ左翼系の学生も非常に多かった。大学に行くと封鎖されていたりして、まともに講義が聴けないような状況がずいぶんあったと思います。

私がこの大学に入ってびっくりしたのは、この大学にはまったくそういう学生運動がなかったことです。左翼系の学生は、地下で活動されていたかもしれないですけども、表立っては活動していませんでした。立て看もないし、集会もないし、封鎖もありませんでした。

大学に入って、いろいろと大学の学長等からお話をうかがったときに、「うちの大学は、産業大学とついているから、産学共同なんだ」と言われた。「産学共同とは何ですか」と尋ねると、「産業界に役立つ人材を育てるんだ」と。言い方は悪いですけども、「左翼系の学生でゲバ棒を振っているような学生は要らないんだ」と、そういう雰囲気のお話だった気がします。

私の記憶にあるのですけれども、友だちのアパートに行くと、産大以外の同志社や立命館の学生はだいたいマルクス・エンゲルス（カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルス）の、『共産党宣言』とか、カール・マルクスの『資本論』を読んで、非常に難しい本なのですが、それについて議論をしていました。私も買ったのですが、中身がよくわからない。うちの大学の同級生や先輩は、北一輝の『日本改造法案大綱』や三島由紀夫の『文化防衛論』を読んでいました。私も、読めと言われて、三島由紀夫の『文化防衛論』だけは途中まで読みましたけれども、やはりなんとなく馴染まない。要するに、左翼系の学生たちが読んでいた本も読みこなしていないし、どちらかという右翼系の学生の本も読まない。要するに「ノンポリ」というか、本当に何も考えずに過ごしていました。

学部時代の思い出

中馬さんもそうおっしゃっていましたが、私も大学では法学部の講義にはまともに出ていません。講義をほとんどサボりました。中馬さんがすごいのは、サークルを掛け持ちしたり、アルバイトをしたり、学外活動をしているじゃないですか。私は何をしていたかといえば、友だちのところへ行行って、毎日、麻雀と夜の酒盛りばかりでした。A君の親から仕送りがくれば、みんながそれにたかる。回り回って私に仕送りがくる頃には、私の部屋にみんなが来て、その仕送りを使い果たす。そういうことをずうっとしていました。だから、そのときは酒を飲んで、いろいろな楽しい、先輩・後輩との馬鹿話ばかりやっていて、大学っていいところだなと思っていましたけれども、講義にはほとんど出ていません。

いまは出席をとりますけれども、当時は出席をとらなかつた。だから、試験前になったら、先生の最終講義ぐらいには行くんですね。そして、教壇の前に集まって、「先生、（試験には）どこが出るんですか」と。「君ら、ちゃんと勉強していたら、ちゃんと受かるから」と言われて、「いや、勉強してないから、教えてくれって言ってるんだよ」と。（笑）それで、「どこ、出るの」としつこく言ったら、「こことここ、勉強しとけや」と言

われるから、そこだけを勉強するんですよ。そうすると、だいたい最低クラスの「可」は取れる。これはすごくありがたかった。

思い出として残っているのは、憲法の大石（義雄）先生です。「おれの論文、読んでおけ」と言う。その論文というのは、「靖国神社法案と日本国憲法」というタイトルの論文なんですけれども、それを読めと言われるから、それを買って全部徹夜で読んで、その要約したものを書いたら、「秀」ですよ。少し誇張していますが、大石先生の憲法観というのは異質で、聴いていておもしろかったのを覚えています。

それから、溜池（良夫）先生の「国際私法」もおもしろかった。中武（靖夫）先生の「刑事訴訟法」もおもしろかった。政治学については、小平（修）先生という方が「政治機構論」の講義をされていて、これも印象に残っています。講義をサボっているといっても、ずうっとサボっているわけではなくて、ときどきは出席しているんですよ。「きょうはどこも行くところがないから、大学へ行こうか」という感じで、行って聴いていると、なんとなく耳から入ってくる。「あっ、これ、おもしろいな」と思いました。

ゼミは、中谷敬寿先生でした。「行政法」で、これも要領よくやらせていただいて、無事に単位をもらえました。

当時の法学部の特色

いま振り返ってみると、当時の法学部の特色として、他大学に比べて実務家の方が結構、教員として来られていたというのが、私の印象です。竹沢喜代治先生は元裁判官で、「刑法」を担当されていました。それから、松本（保三）先生や三木（善統）先生は弁護士だと思いますが、「民法」を担当されていた。「商法」の佐藤（義雄）先生、あるいは「民事訴訟法」の梶田（幸治）先生。おそらく間違いはないと思うのですけれども、実務家の方がかなり多かったです。そういう先生方には、実務のことも話してただける。そうすると、研究者の方ほど掘り下げた話ではないのですけれども、実務に即しているのでもなんとなくわかりやすい。事例、体験談を話し

ていただけるので、なかなかおもしろいなという印象はありました。

大学の授業、当時は講義と言ったのですが、これがほとんど判例・通説をあまり説明されないのですね。もちろん判例は説明されるのですけれども、自説を展開される先生が圧倒的に多かったですね。「私の考え方は、少数説なんだ」あるいは「異端説なんだ」と堂々と自説を展開される。その異端説の本を買えとか言って買わされて、それを読まされて、全然誰も見向きもしないような民法論を一所懸命に聴くとかいったことがありました。自説の講義だけを何回もして、それ以外の分野についてはほんの少し触れるだけで、全部には触れない。いまであれば、とてもできないような講義なのですけれども、「変わってるなあ」という印象がありました。

振り返ってみて思うこと

振り返っていろいろと考えますと、法学部で学ぶということは、いろいろあると思います。中馬さんも、ほとんど授業に出ていないと言われましたが、いくらかは出ておられると思います。私が、経済とか経営とか理工系の方々と比べて、法学部を卒業したメリットというか、特性はどこにあるかなと考えると、だいたい次の三つかなと思います。

一つには、実社会で即戦力になるような法律知識が身につくことでしょう。これはもちろんそのとおりですね。専門的な特別法などを勉強していると、例えば労働法を勉強していると、労働法分野に関して、会社に入っても労務担当として使えるだけのものは、素養としては身につくはずです。

それから、法律系の資格試験に有利ですよ。司法試験もそうですけれども、司法書士試験もそうだし、行政書士とか、いろいろな法律系の資格試験に関していうと、まさにその授業を取ると、自分で勉強するよりもはるかに効率よく理解が進む、ということはいえると思います。

その2点は、もちろんあるのですけれども、私としてはここが法学部の一番のウリですよというのは、次に述べる三つ目です。法的な論理思考と解決に向けてのメソッド、手法が身につくことです。これが大きいのではないかと思います。

「法的な論理思考と解決に向けての手法が身につく」とは

少し細かい話になりますけれども、法的な論理思考と解決に向けての手法が身につくとはどういうことか。結局、社会ではいろいろなトラブル、問題が発生します。そのときに、その問題を早期に発見することです。これは、いまのうちに何らかのかたちで解決しておかないと危ないよ、将来的なリスクがもう発生しているよというふうに、早めに気づく。その事実関係を正確に把握して、問題解決に至るための争点を抽出する。それで、その争点の解明に必要な法システムを選別したうえで、法的検討をして、最適な解決策、いまでいうソリューションを立案する。最後に、それを関係者、当事者に対して、こういうソリューションでやるのが法的な面からはベストですよと提案し、それを実践する。こういうかたちのトレーニングは、法学部が最も得意なトレーニングかなと思います。

このような論理思考と解決に向けての手法を身につけることは、将来、法律分野の仕事だけではなくて、それ以外の分野でも役立ちます。例えば企業のなかでの組織、あるいはコンプライアンス、他の問題でもそうですが、それ以外の例えば政治もそうです。いろいろな組織的活動、社会的活動をするときに、いま述べた法的な論理思考と解決に向けての手法を身につけることが、いろいろな分野で全部役立つのです。必ずしも法律系の仕事に就かなくても、役に立つということです。

この3番目の手法を身につけていただくことが、法学部の何よりの強みではないかと思います。

私が大学のときに受けた授業は、いわゆる座学でした。レクチャー・メソッドというらしいですけれども、先生が一方向的に話しているのを聴くだけでした。聴くだけだから途中で眠たくなってしまったり、集中力も切れてしまう。なかなか完全には身につかないところがあったと思います。

米国ロースクール視察での気づき

2000年から2001年に私はアメリカへ行って、ロースクールを4校ほど見学しました。そうすると、日本とは全然教え方が違うことがよくわかり

ました。そのロースクールでの先生と生徒のやりとりを見ていると、一方的にしゃべるのではなくて、次々に当ててゆく。議論をさせていく。先生と生徒が議論をしていって、生徒同士でまた議論をさせてゆく。そして講義では、その講座で教えるべき内容、コンテンツの全部は教えない。議論をしていって、それをどんどん解決していって、いろいろなヒントを与えながら、いい方向に導いていく。でもその授業では、10を教えないといけないうちの4しか出ていなくて、残りの6は教えない。それは持ち帰って、自分たちで勉強しなさいといっているんですね。それについて私があとで、「すべてのコンテンツを教えてないじゃないか」と言うと、「きみは間違っている」と。「法律知識を教えるのがロースクールの役割ではないんだよ。法的思考力を身につけるのがロースクールの役割だ。知識は自分で勉強して身につけていくものであって、要するに法的思考力が大切だ。議論をして、ディスカッションをしていって、相手を説得していく。こういうトレーニングさえできたら、別にいいんだ」という説明を受けました。なるほど、そういうものが大事なのか、と。そういうものが法律を勉強する意味で一番大事なもののなのか、とそこでわかりました。

もう一つは、日本人にとくに多いのですが、「きみ、どう思いますか」という問いに、Aさんが「こう思います」と言ったら、次の人が「ほくもそう思います」となりますよね。あれは、絶対に言ったらだめだというのですね。「ほくもそう思います」ではなくて、違うことを言いなさい、と。要するに、オリジナリティを出さないとだめなのです。これはものすごく言われました。一つの問題に対して、判で押したような答え、例えば最高裁判例をそのまま敷衍したような意見を言うとか、通説を敷衍したような意見を言うとか、もちろんそれでよいと思うのですけれども、自分の頭で考えて、自分でどう思うかというところの個性を出すことがすごく大事です。そういうトレーニングがすごく必要だということを教わりました。

法学部に期待したいこと

最後に、法学部に期待したいことについて述べたいと思います。

まず、議論を通じて法的思考力や説得力を磨かせる工夫を、ぜひやってほしいということです。ただ、今日の法政策学科の学生や、中馬さんを見ていて、彼らが成果だとすると、もうやれているのかなという気がします。ただ、私も恥ずかしながら法学部で「知財法Ⅲ」の講義をしているのですが、学生たちはまだまだ受け身です。まだまだ、議論することに対して、すごく躊躇があります。アピールする力に関して、まだまだトレーニングが足りていない気がします。別に米国のロースクールの方法がよいというわけではないと思うのですけれども、おそらくロースクール以外のいろいろな欧米の授業を見ていますと、双方向性がかなり重視されていると思います。ゼミになると双方向になるのですけれども、それ以外の科目でも、なるべく学生に質問をすとか、しゃべらせるかたちの双方向性のある授業をぜひやっていただきたい。

それから、いろいろなツールの工夫をしていただきたい。パワーポイントを使うのは、もう当たり前になっていますし、イラストとかいろいろなものを使えます。先ほど紹介したロースクールの場合は、それ以外にいろいろと、テレビのクイズ番組で使うような装置をもってきて、それで「きみ、どう思う？」という答えに対してパッとライトがついたり、ビジュアルに各回答の内容の割合が見れるようになるとか、すごくおもしろい工夫をされているのも見ました。そのようなツールの工夫も、これからの授業スタイルのなかに、ぜひ採り入れていただきたいと思います。

それから、実務的な視点。社会的なニーズとか最先端の法務、こういうものにも積極的に注目していただいて、採り入れていただきたいと思います。最初にふれましたように、私がこの大学の法学部に入学したときに、私の印象として、おそらく他大学と比べると実務家の教員がかなり多かったことから、実務に対する視点をおもちになっている大学だと思います。それと「産学共同」の理念ですね。要するに、社会に役立つ人材を育てるんだというふうな見地。それだけで法学部のあり方をすべて決めてしまう

ことは危険だと私は思いますけれども、そういうふうな視点も必ずもっていないといけない。うちの大学の一つの特色だと思うのですね。私が学生だった時代から脈々と続いている一つの特色だと思うので、ぜひそういう視点をもっていたきたい。

いま、日本のそうそうたる企業が、次々に不祥事を起こしています。コンプライアンス違反とか、ガバナンス不全で大問題になっているケースがあると思います。例えば、タカタ(株)という企業は、エアバッグでは世界で第2位の売上規模を誇っている企業でした。ところがアメリカでもずいぶん前からエアバッグの欠陥問題が提起されて、死亡事故が起こっていたのですけれども、それでも抜本的な対策をとらなかった。そのあとどんどん被害が広がって行って、最終的には、民事再生法の申し立てをして倒産してしまいました。それ以外でも、例えば東洋ゴム工業(株)という企業がありますけれども、免震ゴムの偽装問題がありました。この会社は、偽装が見つかって、そのたびにコンプライアンスだといって、社内体制を変えて、皆さんこういうことはやめましょうと行って、いろいろと規律を一新しているのですけれども、そのあとまた3回、同じ偽装をしているのです。違う製品で偽装していつまでも、偽装、偽装、偽装と続いて行って、最終的には偽装をした子会社を全部、売ってしまわないといけないところまで行ってしまっています。

それから、建築の関係では、横浜のマンションの杭打ちデータを旭化成建材(株)という旭化成の子会社が偽装しているケースもありました。

それ以外には、日産自動車(株)、それから(株)SUBARUの不正検査が昨今の問題になっています。もう少し前では、(株)東芝の不正会計の問題もありましたね。

ああいうふうに、かつてものづくりにおいて非常に信頼性が高かった日本企業のなかで、どういうわけか、物、サービスに関して、売上とか生産台数とか、そういうものにばかり社内の注意がいくようになってしまっている。一番大事な、顧客の安全、顧客の信頼という視点が抜けている。そこからへんに関するコンプライアンスの体制とか、ガバナンスが機能麻痺を

おこしている。このような大問題が俎上にあるので、コンプライアンス問題、ガバナンス不全の問題について、法学部のなかのひとつの講座とか、ゼミとかたちで取りあげてみてもおもしろいと思います。これを取りあげるとなると、おそらくいろいろな専門家に集まっていたかかないといけないと思います。おそらく一般的な会社法の専門家にも集まっていたかかないといけないと思うし、それ以外に建築の問題であれば、建築関連の法規に詳しい方、あるいは実務に詳しい方、自動車であれば自動車関連の製造に関する、いろいろな法令に詳しい方、そういう方々がチームを組んでいかないと、抜本的なコンプライアンスは達成できないと思います。そういうものを提案できるんだという視点をもってやれば、京都産業大学というのは、昔からそうだけれども、こういう最先端の実務的な視点を重視している大学であるし、ユニークな大学でもあるという点では、おそらく注目を浴びていくのではないかと思います。

そういうふうな面での視点を活かしていただけるのであれば、本学の法学部は将来的にもますますニーズが維持されるというか、そういう学部に育っていくのではないかと私は思います。

私が言いたいことはおそらく、皆さんがおっしゃっていることと同じだと思います。教えるときの教え方ですね。それは思考力とか、説得力とか、いろいろと述べましたが、要は活性化されるというか、お互いに教員と学生のコミュニケーションというのでしょうか、それを頻繁にとっていただくかたち、要するにディスカッションとかたちになると思うのですけれども、それでどんどん刺激を与えていっていただく。刺激を与えることによって、しゃべることによって、自分の考えもまとまるし、そこでいろいろな発想方法、表現力、それから説得力もできてくると思うのです。そういう点など授業の工夫もしてもらいたい。

それから、コンテンツとしても、従来型の講座はもちろんベースメントとして必要なのですけれども、なるべく最先端の社会的なニーズ、最先端法務でいま問題になっている部分について、それに対する一つの処方箋を出せること。もちろん法的な視点からの処方箋になってきますけれども、

そういうことが法学部として、とても大事です。コンプライアンスというのは、いま、ものすごくニーズが高いです。あちこちの会社でコンプライアンスのためにいろいろな組織を構築して、いろいろな人材を登用して、外部から専門家を招いて、社内教育を徹底していますよね。それをしないと、ちょっとしたコンプライアンス違反で会社がつぶれてしまう。いまは、隠せない。ちょっとした不祥事でも、必ず表に出ます。それを放置していると、どんどん傷口が深くなって行って、最終的にはタカタ(株)のようなことになって、潰れてしまう。それはあり得ない。そういうことをしてはだめなのです。そこらへんは法学部の法的な視点という面で考慮していただいてよいことかなと思います。

簡単ですがけれども、法学部に対する私の提言は、こういうかたちでござります。どうもありがとうございます。

—(拍手)—

○司会(中谷。以下同じ) 釜田先生、本当にありがとうございました。

1974年卒業の釜田先生と、2011年卒業の中馬さんですが、お二人の話をこうして続けてお聞きしていて、もともとは、はみ出し型の中馬さんと、王道の釜田先生と考えていたのですが、やはりつながっていますね。お二人のお話のなかに、どちらも結局のところは、実社会、現実の社会とのつながりは大事にして、そこで法的思考で考えていく、というメッセージがとても強くあったのかなと思っています。

釜田先生、先ほどおっしゃっていたことですが、やはり法的な知識よりも、法的な思考そのもの、これを養うのが何よりも法学部の使命という、そういう理解でよろしいですかね。

●釜田 そうですね。専門的な知識というか能力に関しては、絶対に学生よりも教員のほうが上回るはずですよ。法理論や法的な知識で先生を論破する学生なんて、まず出てこないと思うのですが、それでも、一つのケースに関してやってみると、いままでなかったような発想が出て

きますよね。それは、結構、説得力をもっていますよね。

私が法学部に来て、結構、法学部が気に入ったのはどういうところか。高校までは答えは一つだとずっと教えられてきたのですが、私はそれが大嫌いでした。理科の実験なんて、必ず A、B、C…という工程を全部やっていって、最後に E という結果が出るように皆さんやりなさい、と。私は、E という結果が出るのがわかっているなら、やっても仕方がないと思って、途中で A ではなくて X を入れてやる。違うものを入れたら、全然違う結果になってしまう。それで、私の班はものすごく点数が悪かったことがあるのです。私は、既製品を押しつけられるのが、昔からものすごく嫌いなのです。違うことをやりたい、というのがずっとありました。だから、司法試験を受けるといった馬鹿みたいなことをやってしまったのですけれども。結果はよかったですけれども。

要は、法学部に来て一番びっくりしたのは何かと言ったら、最高裁判例とか通説を批判しても A が取れるということでした。これがすごいなと思いました。高校までであれば、最高裁判例に基づく説を述べるとか、通説に基づく説を述べたら、それで合格点をもらえた。でも、大学に来てわかったのですけれども、異端説や少数説の先生がいらっちゃって、それはそれで私は気に入ったと思ってそう言えば、よい点がとれた。これが法学部はすごいなと思った。違うことをいってもよい点が取れるというところが、すごく好きになりました。

○司会 なるほど。いまのお話のなかに、法学部からなぜクリエイティブな人が出てくるのかという、それがじつは入っているのかもしれないね。つまり、考えてみたら、なんとか知識といって学ぶ学部が多いのですけれども、法的思考を学ぶ、こういった「思考を学ぶ」と言い切ってしまうのは、法学部ぐらいですよ。そういう意味では、応用範囲が広いのかなと改めて思います。

●釜田 話が長くなりますけれども、私が司法試験を受けようと思ったのは 4 回生の秋からでした。それまでは、『六法全書』は買いましたけれども、教科書もほとんど先輩から譲ってもらうとか、借りることが多く

て、あまり勉強していない。4年の秋から就職活動をしたのですがどこにも採用されなかったので、親に言い訳する意味で「司法試験を受ける」と言ったら、親が「かまへんよ」と言ってくれたから、それですうっと、しばらく働かなくていいわという感じで、挑戦を始めたというところがあるのですけれども。

実は1回生、2回生のときから、司法書士試験に向かって勉強するグループが大学の友人のなかにおいて、その人たちは一所懸命、分厚い基本書を読んで勉強していて、知識がすごいんですよ。その人たちより、私が早く受かったというのは、ちょっと違うんじゃないかな、と。知識の詰め込みだけではだめなんじゃないか。やはりそれだけを覚えて、おうむ返しに、そこを叩いたら答えが出てきますなんて、まさにコンピュータが今後もやっていく世界じゃないですか。クリエイティブなものをつくっていかないと、法律系もだめだと思うので、そういうふうな勉強方法というのはじつは間違っている。しかし、法的な思考力、論理力を身につけていくと、新しい問題に対して、これまでと違うルートで新しいソリューションを出してくれるかもしれない。それがすごく大事なかなという気がしています。

○司会 わかりました。釜田先生、本当にありがとうございました。

もう一度、改めて拍手をお願いいたします。

—(拍手)—

○司会 今日のシンポジウムは「現在と未来」という題名で進めてまいりました。現在は学生の発表を通じてご紹介できましたけれども、未来はどこに行くのかなと思いましたが、今日、わりとはっきりとした答えが出てきた気がしますね。それはしかも、もともと私たちがクラシックに大事にしてきた法的思考そのものを、現場、実社会のなかで鍛え直していくということであろうと、改めて思いました。それを追求していくと、お二人のようにクリエイティブな仕事をする人が出てくるのだらうなと

思いました。その道が、はみ出し型であったとしても、王道を歩んでいくとしても、大学というものを十分に使って、楽しんで、その思考力を身につけて進んで行けば間違いはないのかなと思います。私のまとめとさせていただきます。